

大学基礎教育としての文章表現能力指導の可能性と課題

Possibility as the university basic education in the sentence expression guidance

中尾 桂子¹, 柴田 実², 中谷 由郁², 東 順子², 平林 一利²,
田中 信之³, 浅津 嘉之³, 吉田 晃高⁴, 秋山 實⁵

¹短期大学部国文科, ²大妻女子大学非常勤講師,

³北陸大学留学生別科, ⁴近大姫路大学, ⁵東北大学大学院

キーワード: 文章表現, 語彙量, 「思う」, 段落, 文体

1. 研究の目的

本学文系の「文章表現」科目を担当する指導者から、大学の基礎教育としての「文章表現」科目における評価観点や到達水準を含めた指針の開示が望まれてきた。一方で、社会状況の変化から、従来の指導以上の表現能力が望まれるようになってきたことから、学生の実状に合う指導内容、より効果的な教授法について新たに検討する必要性が生じている。

これを受け、2009年度に、「文章表現」指導を考える会を短期大学部国文科の有志で発足させた。1年目は、短期大学部国文科内の教員に意識調査を行い、各教員の学生の文章記述に対する意識を確認した。2年目は、指導時に教員が抱いた意見を交換しながら、「文章表現」科目担当者の個々の授業観察や学生の問題等を報告しあった。3年目は、教材開発等へつなげていくことを念頭に、国文科から、さらに、広く考えて、「文系教育における文章表現」の指導内容やポイントを可能な限り明確にしようとしている。

その目的は、初年次の基礎教育である文章表現能力指導における問題、指導内容の達成度、課題を観察し、本学文系における文章表現指導の充実に役立てようとするところにある。

2. 活動実施報告

2012年度は「文章表現」指導内容再考のための基礎研究として、学生の記述における問題の特定、その性質や傾向について分析を行なうことにした。

まず手始めに、アカデミックスキルの本学の基準を調べるために、学生の語彙力を調べ、ついで、記述時の無配慮な語の使用傾向、ならびに、形式面の規則遵守に関する問題を観察した。

また、指導方法における授業形態と学びの関係を調べるために、従来とは異なる教授法を試みた。

結果、語彙力調査からは、語彙量が専攻別に差があること、語意の認識に不十分な点が見られること、文末の「思う」調査から、その使用に偏りが見られること、文体上の規則からは、書き言葉の特性が把握されておらず、表記規則の遵守意識が低いことが明らかになった。

また、画一的な一斉授業よりは、個別対応の指導が反応、学びへの影響が強いことが改めて確認され、現行のシラバスでも、学習マネジメントが可能な e-learning 系システムを利用すれば、より効果的な学び方が導入されることが確認できた。

以上の結果に基づき、それぞれの問題を考察して、指導につなげる方向性についての検討可能性が確認できた。この報告を中心とした3年間の研究助成の成果は、2009年～2011年の報告書(2012年3月発行)としてまとめている。

3. 研究目標の達成状況

2012年度は、3つの課題を考えていた。すなわち、①本学の学生の指導における問題点を確認、②学科へのアンケート依頼と回収結果から学習到達水準を決定、③他大学の作文指導において学生の内省や内的活動と表現活動との関連性を調べるといったものである。

手始めに、①の課題として、本学の学生の指導における問題点を確認した。しかし、この①の課題を検討する段階で、文系の「文章表現」科目の指導者から、それにより、各教員が特に気になる点として、語彙力の格差、文体上の傾向、形式的規則に対する認識差といった3点の問題が大きいという指摘があり、この点の詳細を調査することで、学生側の課題を具体的にしておきたいという希望が出た。

そこで、当初の予定を変更し、②の課題は、各教員の課題と考える具体例を詳細に提示してから、

教員の意識を探るために、次のステップに廻し、先に、学生の記述に見られる問題点、現状を具体化することにした。

③の課題については、授業方式の検討であることから、協働研究者の中その他大学のチームとの連携であることから、これは①と平行して行い、作文指導における授業形態として、協働学習の観点から、学生の内省や内的活動と表現活動との関連性を調べた。

以上に基づき、学生側の問題点、対処法としての授業運営を再度検証し、現時点での最適だと考えられる指導指針、目標、方法をコースデザインを合わせて考察した。

4. まとめと今後の課題

学生の側に見られる問題のうち、経験的によく目にする実態の一つとして、学生の理解語彙量、読書量との関係、「思う」の使用状況、記述時の形式的な側面について調べた結果から、指導上示唆的な観点が導き出された。

まず、語彙力調査により、大妻の短大と文学部の学生の語彙量平均が、一般的な社会人レベルと同程度であることが確認できたが、同時に、語意を階層的な体系において把握しているわけではないこともわかった。これにより、語彙数を増やす場合には、意味カテゴリーとその下位といった系統性にも配慮して、正確な語意を把握するような指導を検討していく必要があると考えられた。

次に、学生の「思う」の使用から、「あいまい」性を明示する表現として除外する指導ではなく、使用すべき箇所で使用する方法を積極的に、指導した方がよいと判断された。もし、「表現」の目的を、単にレポートや論文の形式的な面におくというのではなく、文系の学生として、より豊かで自然な日本語の表現を意識させるといった観点も指導の対象と考えるならば、対象の規模を大きくして、具体的な適切性の調査など、より詳細に表現自体の使用意図を文脈やテーマから考える必要がある。

また、従来、経験知で指摘されていた形式面での記述規則の遵守に対しての意識が低いことが確認されたことから、学生の意識を改善していく必要があり、そのためには、学生が何を考えて文章を書いているか、規則に関してどのように思っているかについて、意識調査を行ないながら、理解度を把握していく方法を検討する必要があると判断された。

学生側の問題に関しては、以上のような観察から、

実態と問題を明らかにできると確認できたが、縦断的に何年かの学生を調べ、その平均から判断すべきことでもあるため、今後も、同様のケーススタディーを積み上げ、「文章表現」指導の目的別指導内容と留意点を検討していきたい。

一方、授業形態における協働学習導入の試みでは、学生の個人個人の参加の度合いが高いと意識できるような形態を取り入れることで、学びの質、他への関心が増し、同時に、理解が促進されることが確認できた。これにより、プロセス重視だが、評価を迅速にする方向で変容させていくことを検討すべきであると考え、現行のシラバスをそのままに形態だけ変容するならば、学習マネジメントシステムや掲示板、メール等の積極的な利用方法を検討する必要があると考えられた。

5. 研究成果

1) 著書、学術雑誌

- [1] 中尾桂子・柴田実・中谷由郁・平林一利「「文章表現」指導内容再考のための一考察—学生の語彙量、記述上の形式的規則に見られる問題点の観察をもとに一」大妻女子大学文系紀要, 2012, pp1-30.
- [2] 中尾桂子「国語・国文学論文におけるアカデミック性判断の指標」『大妻国文』, 2012, pp1-13.

2) 学会発表

- [1] 浅津嘉之・田中信之・中尾桂子・秋山實「学習管理システム(LMS)を利用した非対面ピア・レスポンスの可能性—質的分析手法(SCAT)を用いた分析—」第20回小出記念日本語教育研究会, 2011.7.4, 於 国際基督教大学.
- [2] 山本卓司・中尾桂子「日本語学習者の添削作文における違和感の分析」, 修剛, 李云博編『異文化コミュニケーションのための日本語教育1』2011.8.21., pp.759-761, 高等教育出版社(北京).

3) その他(公開講座・研究会, 特許, 受賞, マスコミ発表等)

- [1] 中尾桂子「国語・国文学論文におけるアカデミック性判断の指標について」, 統計数理研究所共同研究レポート 277『統計手法を利用した言語データ分類』, 2012, pp23-24.
- [2] 中尾桂子他「2010年度—2011年度 研究成果報告書—大学基礎教育としての文章表現能力指導の可能性と課題」大妻女子大学人間生活文化研究所 H23 共同研究プロジェクト 037 番報告書, 2012.